

## パート 1：裏切られた愛の庭

### GOD WITH US Epilogue THE THREE GARDENS

#### 神はわれらと共に

#### エピローグ

#### 3つの庭

この 45 年間、シャーリーと私は、聖書を研究してきたわけですが、深く研究すればするほど聖書のメッセージが単純であることに気づいていきました。細かい、沢山の章に区分された、壮大な愛の物語です。簡単に言うと、「God lost something, and He wants it back. (神が失くしものをされて、それを取り戻したいと願っておられる。)」です。今日、5 年半にわたる、「神はわれらと共に」の学びの旅路を終えるにあたり、聖書の物語の主要な出来事が起きた 3 つの園を見ながら、最後にもう一度、この壮大な愛の物語をもう一度振り返ります。これらの 3 つの園の間には、絶妙な間隔があいています。1 つ目は、創世記、二つ目は、中間、三つ目は、聖書の最後です。それぞれの 3 つの園に立つとき、壮大な愛の物語全体を感じることができます。

創世記第 1 章は、神が天地を創造された事実を宣言しています。しかし、神の最高傑作は、神に似せてお創りになされた男と女の創造でした。人類は、創造主なる神と特別な愛の関係を保持するために創造され、その愛の関係を開花させるために特別な場所をお造りになされました。それは「エデン」の園と呼ばれ、「喜び」、または「歓喜」を意味します。

エデンの園は、素晴らしかったと聖書は言っています。そこには、目に美しく、食べるに適した、あらゆる種類の木がありました。園には、大きな川が流れていて、チグリス川とユーフラテス川を含む、世界で最も有名な 4 つの川に水を供給しました。エデンの園には、人懐っこい、あらゆる種類の動物が共存していて、アダムが、それぞれの動物に触れながら名前を付けることができました。神が、アダムにエバという名の伴侶を与えられたとき、エデンの園は、さらに喜ばしい場所となりました。あるヘブライ語の学者は、アダムが最初にエバを見たときの感嘆の言葉をヘブライ語で、「WOW! (わお!)」と訳された可能性を示唆しています。エバは、「WOW! (わお!)」という感嘆に相応しい神の傑作でした！エデンのすべてが WOW と褒め称えられるに相応しい出来栄でした。

しかし、エデンの園で、はるかに褒め称えられるべき「WOW!」は、神の御子との日々の特別な交わりでした。御子は、日の涼しいうちに園にやって来られ、アダムとエバと、共に歩きながら会話をされました。聖書物語の後半で、**1:18 神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである**（ヨハネ 1：18）と言われていることから、エデンの園で、アダムとエバと共におられた神が御子であられたことを私たちは知っています（ヨハネ 1:18）。さらに、私たちが御子のために創造されたということも学びました。**1:16 万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。**（コロサイ人 1：16）

これは壮大な愛の物語を理解する上で非常に重要な部分です：私たちは御子のために創造されました。御子が花婿で、私たちは、その花嫁であると聖書は言っています。御子がアダムとエバと共に時間を過ごされるために、エデンの園に入ってこられた理由がここに 있습니다。また、エデンの園の中央にある 2 本の特別な木を説明します。

**2:9 また主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。**（創世記 2：9）

**2:16 主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。2:17 しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。**（創世記 2：16, 17）

アダムとエバは、御子と共に永遠に生きることを意図されていました。それは、いのちの木の存在を説明します。二人がこの木から取って食べる時、永遠に生きる力を与えたとされています。

しかし、神の御子との愛の関係の内に、永遠に生きることを意図されました。これは善悪の知識の木を説明します。真の愛には、相手を愛するか、愛さないかを選択することが必要です。真の愛を強制したり、操作したりすることは不可能です。ですから、神は、人間に自由意志と、その意志を日々行使する機会を与えられました。この禁じられた木（善悪の知識の木）は、神との関係の結婚指輪の様でした。神に「Yes」と言い、他の選択肢に「No」と選択する機会を与えていました。たまたま、結婚式の誓いの中で、「他のすべての人間関係を見限り、妻／夫だけに、忠実になる」という様な台詞を耳にす

ることがあります。まさにこの木は、「他のすべてを見限る」木でした。これは神への排他的な献身の印でした。

しかし、「喜び」という名の園は、裏切りの場所となり、愛の物語全体の舞台を設定しました。人が、どれだけの期間、神との完全な愛の関係の内に生きたかについては、知らされていません。知らされていることは、最終的に欺瞞者、サタンとして知られている墮天使が園に現れたということです。サタンは、善悪の知識の木に現れました。サタンには、アダムとエバに、神を見捨てさせ、サタンと共に園を立ち去らせる目的しかありませんでした。

**3:1** さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」。**3:2** 女はへびに言った、「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、**3:3** ただ園の中央にある木の实については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。**3:4** へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。**3:5** それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。(創世記3:1-5)

神の意図を疑わせ、愛を疑わせ、真にあなたを気にかけておられることを疑わせ、神があなたを騙し、抑制し、あなた

の最高の人生を奪っていると信じさせます。これは、後にイエスが「嘘の父」と呼ばれたサタンの嘘です。神学者が言う「人間の墮落」とは、神の愛を疑うことを選択し、神の愛から離れることを選択することです。それは、まさにアダムとエバが犯してしまった罪でした。

**3:6** 女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。**3:7** すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。(創世記3:6, 7)

アダムとエバは、直ぐに、何かが酷く間違っていることに気づきました。二人は、初めて罪悪感と恥による痛みを感じました。お互いから隠れ始め、神から隠れ始めました。神の御子が日々の交わりのために、エデンの園にやって来られたとき、アダムとエバは、いつものように神のことを待っていませんでした。

**3:8** 彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間を身を隠した。**3:9** 主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。**3:10** 彼は答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だっ

たので、恐れて身を隠したのです」。3:11 神は言われた、「あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか」。3:12 人は答えた、「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。3:13 そこで主なる神は女に言われた、「あなたは、なんということをしたのです」。女は答えた、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」。

(創世記3：8－13)

二人は隠れ、お互いを非難し合いました。しかし事實は、二人が神の愛から背を向けることを選択したということでした。神を裏切り、別の人に従うことを選びました。

悲しいことに、神の御子は、二人が神から離れたために、世に「死」が入ってきたことについて説明されました。彼らの人間関係は、争いによって汚染されるでしょう。彼らの労働は労苦と汗で満たされるでしょう。出産と子育ては、苦痛に満ちるでしょう。最終的に、彼らの命は、肉体的死に終わるでしょう。さらに悲しいことに、二人は、エデンの園から追放されなければなりません。いのちの木は、彼らを永遠に生き続ける力を持っていたからです。神の御子は、二人がこの墮落し、破壊され、疎外された状態で永遠に生きることを望んでおられなかったので、あわれみ深い神の御子

は、二人から、園といのちの木へのアクセスを取り除かれました。

しかし、御子がアダムとエバを園から追い出される前に、愛の物語の残りの段階を設定する、非常に重要な二つの出来事が起こりました。一つ目の出来事は、御子が、いつか人類のために戦い、蛇を打ち砕かれるために来てくださると二人に約束されました。

3:14 主なる神はへびに言われた、「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最もろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。3:15 わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」。 (創3：14, 15)

学者たちは、それを原福音書 (最初の福音書) と呼んでいます。最初の良い知らせ (福音) の宣言です。私は、それを「serpent-crusher (蛇の頭を砕く)」の約束と呼んでいます。神の御子は、いつか蛇の頭を砕き、アダムとエバを庭に連れ戻すために戦ってくださることを約束されました。

二つ目の出来事は、御子は、アダムとエバに動物の皮の衣を着せられました。これは、彼らが追放される前に、エデンの園の中で起こった、聖書の最初の犠牲です。おそらく、神の御子は、自身の犠牲と死という、彼らを連れ戻すご計画の

ために、どのような代償がかかるかを暗示しておられたのでしよう。

創世記3章の終わりで、アダムとエバは、エデンの園から追放されて、過酷な新しい現実の世界に入りました。父親の家を離れる選択をした放蕩息子のたとえ話と同様に、遠く離れた国で、アダムとエバは苦勞しました。私たちは皆、アダムとエバと同じ放蕩息子と娘です。深く愛してくださる神から離れて、人生の幸せと目的を見いだそうとしています。

## パート2：表示された愛の園

人類に約束された、蛇を打ち碎かれるお方が来てくださるのを待ちながら、何千年が経過しました。使徒パウロは、それらの何世紀間を次のように要約しました。

**17:26** また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。**17:27** こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびひとりから遠く離れておいでになるのではない。**17:28** われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。

(使徒17：26－28)

人類は、神の形をした心の穴を埋めるために、神を求め、神に手を伸ばし、神を見つけようと探求しています。天地創造の声であれ、良心の声であれ、預言者の声であれ、教師の声であれ、神は、失われた息子と娘たちに、家に帰るように呼びかけておられます。御子は、神の性格を世に反映する祭司国家として、一つの国をお選びになりました。日々、犠牲を伴う、イスラエルの礼拝システムは、約束されたお方が来られたとき、罪のために完全な犠牲を払わなければならないことを人々に思い出させました。

しかし、イスラエルの究極の目的は、蛇を打ち碎くお方であるメシアを世にもたらすことでした。そしてついに、その時が来ました。使徒パウロは、こう書いています：**4:4** しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。(ガラテヤ4：4) 彼らは、御子をイエスと呼びました。これは、簡単に言えば、「神がお救いくださる」ことを意味します。イエス様の誕生の時さえ、このお方が私たちの救い主であることが明らかにされました：**1:21** 彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」(マタイ1：21)。イエス様が30歳になられ、公の宣教を開始されたとき、イエス様について語られた最初の言葉は、次のとおりでした：**1:29** その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言

った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊（ヨハネ 1：29）。イエスは、最初のエデンの園で起こった罪の問題に対処するために、天から来られました。イエスご自身が、次の様に言われました：**19:10** 人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」（ルカ 19：10）。そして再び、御子が来られた理由を要約されました：**10:45** 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マルコ 10：45）。御子は、身代金として、ご自身の命を捧げてくださることによって、失われたものを取り戻すために来られました。これは私たちを第二のエデンの園へと繋げます。

イエス様は、神がどのようなお方であるかを3年間の公の宣教を通して私たちに示された後、ご自身が神であることを証明され、地上生涯における最後の週に、イエス様が来られた真の理由について話し始められました。

**12:24** よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

（ヨハネ 12：24）

**12:27** 今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしは

このために、この時に至ったのです。**12:28** 父よ、み名があがめられますように」。すると天から声があった、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。（ヨハネ 12：27－28）

ここで、十字架上の死の前夜、第二の園における神の子、イエスを見ましょう。ゲッセマネと呼ばれ、「オイルプレス」を意味し、オリーブオイルプレスがあったオリーブの木立であったことを示しています。イエスは、そこに、地上生涯の最後の週に、弟子たちと共に行かれました。

イスラエルの祭司や王に油を注ぐためにオリーブオイルが用いられたので、そこに引き寄せられたのかもしれませんが。

「メシア」と、は「油そそがれた者」を意味しました。それは、イエス様ご自身が油そそがれた者、送られた者であることを思い出させたかもしれません。あるいは、ビジュアルなものであったのかもしれませんが。ねじれた木々は、人類のねじれた状態、つまり御子の花嫁を思い出させたかもしれません。ともあれ、御子は、ご自身のいのちの犠牲によって、その花嫁を取り戻す準備をするために、この園に来られました。

イエス様の地上生涯における最後の夜に、ゲッセマネの園を人類への愛が示される場所へと変えられました。福音書を組み合わせると、ここで何が起こったのかを説明します。

26:36 それから、イエスは彼らと一緒に、ゲツセマネという所へ行かれた。そして弟子たちに言われた、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここにすわっていなさい」。26:37 そしてペテロとゼベダイの子ふたりとを連れて行かれたが、悲しみを催した悩みはじめられた。26:38 そのとき、彼らに言われた、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。26:39 そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」。26:40 それから、弟子たちの所にきてごらんになると、彼らが眠っていたので、ペテロに言われた、「あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。26:41 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。26:42 また二度目に行って、祈って言われた、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」。26:43 またきてごらんになると、彼らはまた眠っていた。その目が重くなっていたのである。26:44 それで彼らをそのままにして、また行って、三度目に同じ言葉で祈られた。26:45 それから弟子たちの所に帰ってきて、言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫っ

た。人の子は罪人らの手に渡されるのだ。26:46 立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた」。

(マタイ 26 : 36 - 46)

22:43 そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。22:44 イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。

(ルカ 22 : 43, 44)

血汗症とは、感情的、および肉体的な極度のストレスによって引き起こされる、皮膚から血液が滲み出る非常に稀な疾患です。イエス様は、天使に強めてもらう必要があった程、極度に辛い経験をしておられました。人類の罪の重荷を背負い、罪に対する神の裁きの杯を飲まなければならない前途に苦しんでおられました。イエス様の祈りの内容を説明します。可能であるなら、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」神の裁きの「杯」は、当時のユダヤ人にとっては、馴染みあるイメージでした。人類には、神の祝福の杯を飲むか、神の裁きの杯を飲むか、二つに一つを選択しかありません。イエス様が地上に来られた目的は、人類の罪が赦され、清められ、園における永遠のいのちが修復されるために、神の裁きをご自身に引き受けられ、世の罪のために死なれることでした。まさに、その受難の現実には直面されていました。

イエス様が、ゲッセマネの園で何を経験されたかを完全に理解することは不可能です。人類の運命は、この夜、この時間に、このゲッセマネの園で、天秤にかかっていたと言えるでしょう。翌日、十字架に向かおうとしておられるイエス様の、十字架を受け入れるという決定は、この夜、ここで下されました。カルバリー（ゴルゴタの丘）は、犠牲が捧げられた場所でしたが、ゲッセマネは、私たちへのイエス様の愛が完全に展示されていた園でした。

### パート 3：復元された愛の園

イエス様は、死と復活を通して、蛇を打ち砕かれました。イエス様の死は罪を打ち負かし、その復活は、死を打ち破りました。この世のすべてのアダムとエバは、永遠に赦されることが可能となり、神の御子との愛の関係が回復します。イエス様は、聖徒たちに、神が失われた息子と娘を永遠の家族に養子縁組する準備が整っているという良い知らせを広めるように言われました。教会は、このイエス様の教えを守り、過去 2000 年間、伝道を通して、このメッセージを世に広めています。

**3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ 3：16）**

イエス様はまた、ご自身の花嫁を園に連れ戻されるために、いつかまた来られるという知らせを広めるようにとも言われました。C.S.ルイスが言いました：「この世では、満たされることができない願望を抱いているとしたら、最も可能性の高い説明は、私たちが別の世界のために創造されたからです。」 真実は、私たちは別の園のために創造されました。

私が、聖書から神学を学ぶずっと以前に、聞いて育った音楽から学んだことがありました。60年代、70年代の音楽で、いつ聞いても、しっくりくる曲でした。ジョニ・ミッチェルは、ウッドストックの曲の中で、私（ポプ牧師）が探していたものを捕えていましたが、私（ポプ牧師）には、未だ見つけることができませんでした。「... 私たちは、園に戻らなければなりません。」 アダムとイブ以来のすべての世代は、私たちが悪魔の誘惑に巻き込まれていることと、より大きな目的があることを直感的に知っていました。私たちが待ち焦がれてきた園は、自力で戻ることができない園であったことに気付くまでに何年もかかりました。花婿だけが、私たちを園に連れ戻すことができました。

聖書の最終章で、花婿は、その花嫁を園へ連れ戻してくださいのために来られます。黙示録第 19 章では、神の御子である子羊の結婚式について、天の聖歌隊が歌っているのが聞こえます。



**19:7** わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。

**19:8** 彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。

(黙示録 19 : 7, 8)

イエス様は、その花嫁を一掃し、永遠の家、完全に新しい天と新しい地に連れて行ってくださいます。使徒ヨハネには、それがどの様であるかについての幻が与えられました。ヨハネは、新しい天と新しい地、神が人類と共に永遠に住まわれる場所を見ました。もはや死もなく、涙もなく、苦しみも、悲しみも、痛みもありません。ヨハネは、完璧な世界を見、その世界の中心にある最後の園を見ました。

**22:1** 御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、**22:2** 都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。**22:3** のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、**22:4** 御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。**22:5** 夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらぬ。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。(黙示録 22 : 1 - 5)

エデンの園には、大きな川がありました。ここで、永遠の都に、神の御座と小羊から流れる川を見えています。エデンの園には、いのちの木がありました。ここでもまた、都の大通りの中央を流れています。呪いは最初の園に下り、最後の園で、消し去られました。神と人類は、最初の園で分離されました。神は、再び人類と共に、最後の園で、永遠に住まわれます。私たちは、御子の御顔を見上げ、探してきたものを見出だしたことを知ります。

永遠の都、「新しい天と新しい地」のこの幻を与えられた使徒ヨハネは、大きな声が叫び、宣言するのを聞きました：

**21:3** また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、**21:4** 人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。

**21:5** すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにす」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信すべきであり、まことである」。

(黙示録 21 : 3 - 5)

神が人類と共におられる状態は、物語の最初から、神の意図であり、願いでした。所詮、私たちは、神と共に愛の関係の内に生きるように創造されたのです。聖書は、細かい沢山

の章に分けられた、一つの壮大な愛の物語です。私たちと一緒にいたいという神の願いを記す物語です。神は何かを失われ、それを取り戻したいと願っておられます。その「何か」とは、あなたと私です。聖書における御子の最後の訴えは、最後にもう一度、私たちに神の心を明らかにします。

**22:17 御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるとよい。（黙示録 22：17）**

#### あとがき：神の永遠の家族



聖書は、神が私たちが永遠の家族に戻す方法を説明するために、「養子縁組」の類推を用いています。私たち家族は、オークポイントにおける数年間に養子縁組について多くのことを学んできました。2008年、私たちは南スーダンのドミニクを養子に迎え入れました。イエス様が私たちに与えてくださった息子です。イエス様は、放蕩息子のたとえ話が私たちのお気に入りの聖書物語の1つであることを知っておられたのかもしれない。



2012年、ナン、ウィル、グレイシー、ベネットを招き入れ、共に生活することが出来ました。ナンは、私たちの子供たちと沢山遊び、子供時代を過ごしました。彼女が、新しい親としての役割を果たすために私たちを必要とする日が来るとは夢にも思っていませんでしたが、それ以来、彼らのお陰で、私たち家族の生活が豊かになりました。

更に、2年前の6月のある日曜日、オークポイント教会は、私たちの娘に、予期せぬ子を祝福してくれました。ロビーのすぐ傍で、オークポイント教会のある女性が、幼児を委ねるための夫婦を探しているという母親について話してくれました。数日後、サラとデュアンは、出産した母親と繋がり、2019年9月、リバーと名付けた美しい娘の誇らしい両親となりました。リバーは、間もなく2歳で、素晴らしい子供です。リバーの家族になれた、私たち家族全員にとって、これ以上の幸せはありません。私たちは、養子縁組について、多くを知っています。養親になることが、いかに特別なことであり、養子になることがいかに心強いことであるかを知っています。



また、4人の実の子供たちに、特別な感謝を述べたいと思います。この25年間、チャック、サラ、スコット、ルークによる、オークポワント教会を設立し、成長させるための尽力を感謝します。あなたたちが同居していた長い年月の間、非常に多くの犠牲を払い、思いがけない多くの家の侵入を許し、庭と納屋を「教会の中心」にすることを容認してくれました。この教会に数えきれない教会家族をもたらし、応援してくれた、あなたたちのサポート無しには、不可能だったでしょう。ありがとう！



最後に、オークポワント教会家族に感謝します。皆さんの中で、牧師として仕えることは、大きな特権であり、喜びでした。非常に小さな教会の立ち上げから、偉大な神に信頼を置き続け、次の箇所の様な神の働きを見続けてきました：わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたに、3:21教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように、アァメン。

(エペソ人3：20, 21)。

長きにわたり、この群れの羊飼いとしてくださり感謝します。たくさんの山を共に駆け抜けてくださり、ありがとうございます。多くの奇跡のために、神に信頼してくださりありがとうございます。全聖書を通して、3年間の学びに、共に旅立ってください、ありがとうございます。また、最終的に5年半の旅路と延長してしまったけれど、快くついてきてくれてありがとうございます。私たちの弱さを受け入れた上、ますます愛してくださりありがとうございます。神がこの教会のために備えてくださる、次の羊飼いにとって、この教会で仕えられることは、彼らにとって、偉大な祝福です！

